

# 空にわく金色の雲

小川未明

青空文庫



道みちであつた、顔見知りの人ひとは、みすぼらしい正吉しょうきちの母ははにむかつて、

「よく、女手おんなでひとつで、むすこさんを、これまでになさつた。」  
と、いつて、うしろについてくる正吉しょうきちを見ながら、正吉しょうきち  
の母ははをほめるのでした。

しかし、心こころから感心かんしんするように見みせても、じつは母子おやこのしがない暮くらしを、あわれむというふうが見みえるので、正吉しょうきちは子こ供どもながら、それを感かんじていましたが、母ははは、そういつて、なぐさめられると、気きが弱よわくなつているせいか、すぐなみだぐんで、  
「なにしろ、三つひたりのときから、一人そだで育て、やつと来年らいねんは小しょう

学が校こうを、卒そつぎ業ぎょうするまでにしました。」と、うったえるように答こたえたのでした。

あいては、もつと立たちいって、二人ふたりの生せい活かつを知しろうとするのを、正しょう吉きちは母ははのたもとをひっぱって、

「さあ、早はやくいこうよ。」と、その場ばから、はなれたのでした。

正しょう吉きちは、そのときだまっていたけれど、自じ分ぶんの母ははを、きどくに思おもいました。そして、母ははのためなら、どんな困こん難なんもいとわないと、心こころにちかつたのです。

「来らい年ねんは、ぼく、おじさんの家いえへいくのだ。そうしたら、おかあさんは、一人ひとりになって、さびしいだろうね。」と、正しょう吉きちはいうのでした。

「いいえ、さびしいものかね。おかあさんは、はたらいで、はたらいで、そんなことわすれてしまいます。ただおまえが、早く大きくなつて、ひとり立ちするのを、たのしみとしますよ。」と、母は、ねっしんに針をもつ手をはこびながら、答えるのでした。

正吉が学校からかえると、近所の武夫くんとさそいあつて、原っぱへあそびにいき、草の上にねころんでいました。

「だれでも、ほかが、まねのできない技術をもてば、えらくなれると、先生がいったね。」と、正吉は学校で聞いてきた話を、思いだしました。

「ああ、そうだよ。マラソン選手となつて、オリンピックで名をあげるのも、図画がじょうずになつて、名高い画家となるのも、

自分一人だけの名誉でなく、やはり国の名誉だと、先生がいわれたよ。それも、自信と努力することが、たいせつなんだつて。」と、武夫は答えました。

「ぼく、徒競走に自信があるんだがな。」と、正吉は目を見ながやかしました。

「そうだ、正ちゃんは、いつも徒競走では、一番だから、練習して、マラソン選手になるといいよ。」と、武夫は手をたいて、正吉の思いつきに賛成しました。

正吉はきゆうに、からだをおこして、空をあおぎながら、しんけんを考えこんだのです。そして、自分が、はなやかな世界的選手となった日のゆめを、目にえがいたのです。

「なんで、そんなことを、きゆうにいいだしたの。」と、武夫たけおはふしぎに思おもつて、聞ききました。

「もし、そうなったら、ぼくのおかあさんが、どんなによろこぶだろうと思おもつたのさ。だれでも得えて手というものがあるから、それをのばせば、成せい功こうすると先せん生せいがいったので、ぼく、元げん氣きが出でて、うれしくなつたよ。」と正しょう吉きちは、すなおに心こころのうちを、友ともだちにうちあげたのでした。

武夫たけおもいつになく、くつろいだ氣きもちになつて、正しょう吉きちをよろこばせようと、

「正しょうちゃんはいいい子こだと、うちのおとうさんも、おかあさんも、いつていたよ。正しょうちゃんのおかあさんは、いまはくるしくても、

正ちゃんが大きくなれば、きつと樂をされるだろう。」

こうして、武夫が両親のうわさしたことをつけようとするのを、正吉はうちけすようにして、

「ぼくのうちは、貧乏だし、なかなか上の学校へいかれない。来年は町のおじさんの店へ奉公して、夜学で勉強強をする

つもりだ。武ちゃんは、いいおとうさんがあつて、安心して勉強強ができるから、きつと、えらくなれるだろう。ぼくは、自

分の力だけで、やらなければならぬからね。」と、正吉は、日ぐれがたの空に、わきあがる雲を、じつと見ていました。

いま、西の空には、炎の流れるように、赤い雲が、うずをまいていました。そして、ほかにも花びらを散らすように、おなじ色



の雲くもが、ちぎれちぎれにとんでいました。それが、いつしか、一ひとかたまりとなつて、たてがみをなびかせた金色きんいろのししの姿すがたとなつたり、高くたかかけあがる神馬しんめの形かたちをつくつたりして、はるかあの青あお々おあおとした地平線ちへいせんを目めざして、うごいていたのです。

正しょう吉きちはしばらく、その雲くものゆくえを見みまもるうちに、空くう

想うは、町まちの文房具ぶんぼうぐを売うる店みせへと、とんでいました。ちようど、金色きんいろの雲くもが、たれさがつたあたりに、その町まちはあるのでした。

空気くうきとガラスの見みさかいが、つかないほど、よくふき清きよめられたまどの上うえのたなに、青あおくぬられた飛行機ひこうきが、いまにもとび立たちそうなかつこうで、おいてあり、その下したの台だいには、まっかな洋服ようふく姿すがたのおどり子の人形にんぎょうが、片方かたほうの足あしを上げあて立たつていまし

た。それは、野原のほらにさく赤いあかゆりよりも、はなやかであつたし、また川かわふちでかおる、のぼらの花はなよりも、目めにしみるまぶしさで  
ありました。

「武たけちゃん、きみは、町まちの文房具屋ぶんぼうぐやにあるおもちゃを見た？」と、  
正しょうきち吉きちは、そのときぼんやりとして、ならんでいた武夫たけおに聞き  
ました。

「どんなおもちゃだつたかな。バットとグローブは、知しっている  
けど。」と、武夫たけおは、頭あたまをかしげていました。

「青あおい飛行機ひこうきと、赤あかいお人にんぎょう形かたちさんだよ。」と、正しょうきち吉きちは友  
だちを見て、たずねました。

「知しらなかつたな。」と、武夫たけおはてんで、そんなものに気きがつか

なかつたようです。正吉しょうきちは、やっと安心あんしんしました。もし、武夫たけおがそれをほしいと思おもえば、いつでも自分じぶんのものに、することができたからでした。

しばらくして、こんどは武夫たけおのほうから、

「正ちゃんしょう、そんなに、いいおもちやだったの。」と、聞きかえ

しました。正吉しょうきちはそれに答こたえず、

「ねえ武ちゃんたけ、あの金色きんいろの雲くもをござらん。きれいだろう。そして、あちらの空そらをござらん。あの青あおい色いろもきれいだね。ぼく、いままで見みた、美うつくしいものが、みんな目めにうかんでくるんだよ。」と、正吉しょうきちは、とび立たつような、自分じぶんの心こころを、おさえきれなかつた

のです。

つぎの日の昼間、また二人は、この原っぱへきました。武夫がわざと三輪車で走るのを、正吉はそれと競走しようとして、素足で走りました。いまにマラソン選手になる自信をもとうとして、あやまつて、足の指をいためました。

晩になると、その指がだんだんいたみだして、こらえられなくなつたのでした。

「どんなに、なっているの。ちよつと見せな。」と、母にいわれ  
ると、正吉の顔は、たちまち、くらくくなりました。

「おや、えらく、はれているでないか。」と、母はびっくりしました。こうした母のおどろき声は、正吉の心を、するどく、

むちうって、しばらく足のいたみも、わすれたのでした。

ふだんから、母は正吉にむかつて、おとうさんがいないのだから、わたしは、おまえ一人をたよりに生きていると、いわれたのが思いだされて、後悔で、胸が、はりさけそうになりました。

「あつ、おかあさん、いたいから、さわらんでおくれ。」と、足をひっこめようとすると、母は正吉のひざがしらに、ふれてみて、

「たいへんな熱だね。今夜、こうしておいて、さしつかえないものだろうか。」と、うろたえるのでした。

正吉は母があわれになって、すまぬことをしたと思いまし

た。

「あすになれば、なおるよ。」と、いつて、がまんしながら、ねどこにはいったのでした。

医者いしやのもとへいったのは、それから二、三日にちあとのことでした。

「いままで、おじさんのところへ、お金かねのことで、たのみにいつたおぼえはないのだが、こんどばかりは、そんなことを、いつていられないのでね。」と、道みちすがら母ははに聞きかされたことばは、正し吉きちをせめるのでした。

正しやうきち吉きちは、医者いしやが自分じぶんの足あしを見て、なんとというだろうか、こ

のうえとも、自分じぶんたちをくるしめることに、なりはしないだろうかと、診察室しんさつしつへはいると、なんとなく不安ふあんに、足あしがふるえたの

でした。

「なぜ、もつと早く、見せにこなかつたのです。」と、  
 医者いしやは、まゆをひそめながらいいました。

「注射ちゆうしやをしていただいたら、なおりませんか。」「と、  
 母はははわが子この、身みの上うえを気きづかいながら聞きくのでした。

「手ておくれなので、注射ちゆうしやがきかなければ、手術しゆじゆつをするの  
 ですな。そうすると、二、三日にちにゆういん入院にんしなければなりません。」  
 と、医者いしやはすこしの思おもいやりすらなく、ひややかに答こたえました。

医者いしやのところを出でると、

「家うちへかえつて、この水薬みずぐすりで、足あしのいたむところを、ひやし  
 ておいで。」と、母ははは正吉しょうきちとわかれまし。正吉しょうきちは、母はは

のいくさきを、聞きかなかつたけれど、たぶん、おじさんの家いえへいつたのだろうと思おもいました。

やがて、日ひがくれてしまい、しばらくたつて、母はははかえつてきました。

「世間せけんで、金かねもちといわれても、たのんでいけば、金かねがないというものです。はじめてだし、こんどだけは用ようだてするけれど、つぎからは、おことわりだと、きつぱりいました。おじさんだから、とくべつせわしてくれると思おもつては、いけません。たよりとなるものは、ただ、自分じぶんの力ちからだけです。わたしは、これからも、せいっぱいはたらくことにします。」と、母はははいいました。

正吉しょうきちは、なんとも答こたえられず、あついなみだが、こみあげ



るばかりでした。

二、三日、顔をあわさなかつた武夫は、学校からかえると、あそびにきました。

「きよう、先生が正吉くんは、どうして休んでいるのだと聞いたから、ぼくの三輪車と競走して、足をいためたといつたら、なんでそんなばかのまねをするのかといつたよ。だから、ぼくは正ちゃんは、マラソン選手になるので、三輪車なんかに負けられないのだと話したら、先生は、人間の足と機械と、いっしょになるかと笑つた。」と、学校の話を告げました。

「ぼく、つまらんことをした。」と、正吉は、後悔しました。

「もつと、自分をたいせつにしなれば、いい選手なんかにならないと、先生もいつていたよ。」と、武夫はありのままを上げました。

「お医者さんに注射してもらったけれど、いたみがとれなければ、入院して手術するんだって、こまっちゃったよ。」と、正吉が力なくいうと、

「とんだめにあつたね。そうそう、文房具屋へグローブを買いにいくと、店のガラスが、めちやめちやにこわれているので、おどろいた。聞くと、トラックがとびこんで、だいじな品物をこわしたと、店のおばさんがいつていたよ。」と、武夫は、意外なことを知らせました。

正吉しょうきちは、ゆめにさえ見たみた、あの青い飛行機あおひこうきや、赤いおどり子の人形にんぎょうは、どうなつたらうと聞きくと、武ちゃんたけは、見えなかつたから、こわれたのかもしれないといふのでした。

「それで、きみのほしいと思おもつたグローブはあつたの。」と、正吉しょうきちは聞ききました。

「とりこんでいるときだから、まけておくといつて、安やすくしてくれたよ。」と、武夫たけおはよろこびました。

「どうして、トラックが、店みせへとびこんだのだらうね。」

「運転手うんでんしゅが、お酒さけに酔よつていたつて、おばさんがいった。」と、武夫たけおはいいながら、このとき、先生せんせいが正吉しょうきちにいつた言葉ことばを思おもい出したのか、

「やはり、酔よつたりしては、運うん転てん手しゅになれないんだね。」と、  
つけくわえました。

正しょう吉きちは下したを向むいて、だまつていました。足あしのいたみは、そのあくる日ひになつても、とれませんでした。母は親おやは、子こ供どものようすから、すぐにも手しゅ術じゆつを決けつ心しんしたらしく、家いえの中なかをかたづけはじめたのです。

そのとき、ちようど門かど口ぐちへ乳ち飲のみ子ごをおぶつた女おんなこじきが立つて、無む心しんをねがったのでした。正しょう吉きちの母はは女おんなこじきを見みて、子こもちだと知しると、気きぜわしい中なかを、ふところからさいふをだして、金かねを手て渡わたしてやりました。女おんなこじきは、心こころからありがたく思おもつたらしく、いくたびも頭あたまをさげていましたが、そばで、痛いたい痛いた

いと泣き声なごえでうったえている。正吉しょうきちの姿すがたを見ると、おじおじしながら、

「どうなされたので、ございますか。」と、聞きいたのです。

母親ははおやは、こういつてやさしく聞きかれたので、さすがに当惑とうわく

しているときであり、気きも弱よわくなっていたので、こちらも、あり

のままのことを——子供こどもが走はしつて、あそんでいるうち、足あしの指ゆびを

いためて、注射ちゅうしゃをしてもらったけれど、ききめがなく、これ

から、いやがるのをつれて、手術しゅじゆつをうけに医者いしやのところへ出で

かけるのだ——と、ほんとうのことを話はなしたのでした。女おんなこじき

は、そのことを人事ひとごとと思おもわず、耳みみをかたむけて、聞きいていまし

たが、

「それなら、いい葉くすりがあります。このへんにもある草くさです。私わたしの  
 いうことを信しんじて、ためしてごらんなさい。私わたしも金かねのないもの  
 は、神かみさまの教おしえてくだされたもので、どんな病やまいもなおします。  
 その草くさは、秋あきになると、黄色きいろな花はなの咲さく厚あつい葉はです。その葉はを火ひ  
 にあぶり、やわらかにして、傷きず口ぐちにはります。痛いたみはじきとれ  
 て、四よ、五ご日もするど、うみが出てでなおります。」と、ていねい  
 に教おしえました。

母ははおや親おやと正しょう吉きちは、これを聞きいて、一ひとすじの光ひかりが、急きゆうに、や  
 みの中なかへさしこんできたような感かんじがしました。

「その草くさというのは。」と、母ははおや親おやは、すぐにも知しりたかつたの  
 です。

「ちよつと、さがしてきます。」と、女おんなこじきは、門もんから出てできました。

親おやこ子は、そのうしろ姿すがたを、とうとく思おもつて、おがまんばかりに見みおくつたのです。そして、いくたびも、母ははおや親おやは外そとまで出でて、女おんなこじきがもどるのをまっています。

あまりおそいので、その葉はが見みつからぬので、そのままどこへか立たちさりはしなかつたかと思おもい、うたがい、なやんだりしたが、そのうち女おんなこじきは、手てに青あおい葉はをにぎつて、母ははおや親おやの前まえへあらわれました。

「まあ、ありましたかね。」と、とびつくようにして、母ははおや親おやはむかえたのです。女おんなこじきがつくつてくれた薬くすりをつけると、ふし

ぎに痛みがうすらいで、その晩、親子は、はじめて、気もちよくねむりました。

正吉は夢の中で、あのおじおじしたようすで、いたわりながら、薬をつけてくれた女こじきを思い出して、いつまでも、その姿が、目からきえずにのこっていました。

それから、二、三日もすると、足のはれがひいて、きず口に、白いうみをもちました。母はこれを見て、おどろき、

「正吉や、もうだいたいじょうぶだよ。草の名を、よく聞いておくのだったね。あの女こじきに、お礼をいわなければなりません。いつもは、見なかつた女ですのに、あの日どうしてきましたか。こんどきたら、おまえの小さいときの着物がありますから、赤ん



ぼにやりたいたいと思おもいます。氣きをつけていて、見みたら家うちへつれてきておくれ。」と、いつになく母ははは、きげんがよかつたのです。

正しょうきち吉あしは足あしがよくなつたのを、わがことより、よろこんでくれる母ははを見みて、真しんにその恩おんを、わすれてはならぬと思おもいました。

いよいよ明日あしたから、ふだんどおり、武夫たけおくんと学がっこう校こうへいけるようになつた、その前まえの日ひのことでした。

「正しょうきち吉きちや、なにかおまえに、ほしいものがあるなら、おいし。」と、母ははは、つくえの前まえにすわっている正しょうきち吉きちに、たずねました。

これを聞きくと、たちまち、小ちいさな胸むねへ、よろこびが泉いずみのように、こみあげました。

「青い飛行機と、赤い人形と、どちらにしようかな。」と、  
 耳のあたりまで赤くしながら、正吉は答えたのです。

「それは、なければならぬ品ですか。」と、母は聞きました。

「おかあさん、それより、早くおじさんに、お金をかえしたほうがいいよ。」と、正吉はいいました。

「ああ、その金は、きつと、私がそのうち、もっていきますよ。

これは、おまえがつかわずにすんだので、あげますから、すきなものを、お買いなさい。」と、母はひきだしから、いくらかの金をとって、正吉にあたえたのでした。

いま、青い、飛行機でも、赤いおどり子の人形でも、正吉のすきなものを、買うことができるのでした。しかし、もう、

それをかう気が、なくなつてしまいました。

「どんな色でも、そろつている上等のクレヨンを、かう。」  
と、正吉はすぐに、心をきめたのでした。

晩になると、原っぱへいつて、草の上に、こしをおろしました。

そこここに、いつものように、赤い花がさき、青い空は、はてなくひろがつて、地平線につづき、夏を思わせる金色の雲が、西の方からわき出で、音なく、頭の上を、うごいていくのでした。

その雲には、おかあさんがすわつて、仕事をしていました。また、ほかの一つの雲には、乳飲み子をおぶつた女こじきが、のつていました。二つの雲は、たがいに近づき、また、あるときは、かさなり合うようになったが、そのうち、はなればなれとなつて、

いつしか、  
青<sup>あお</sup>い空<sup>そら</sup>へ、  
すいこまれるように、  
きえてしまいました。

## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社

1954（昭和29）年6月

初出：「はじめてのせかい」

1953（昭和28）年6月

※表題は底本では、「空《そら》にわく金色《きんいろ》の雲

《くも》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 空にわく金色の雲

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>